

生涯学習情報誌

Life Learning

2022
Sep
9
NO.385



あおき りょうこ ● 能の「謡」を現代音楽に融合させた「能声楽」を生み出し、2013年テアトロ・レアル王立劇場での衝撃的なデビューを皮切りにヨーロッパを中心に活動。これまで世界20か国55人を超える作曲家たちと新しい楽曲を発表。名門オーケストラと共演するなど世界からのオファーが絶えない、現代音楽で最も活躍する国際的アーティストのひとり

青木涼子さん

能声楽家 (Noh Singer)

生涯学習開発財団理事長・横川浩が各界で活躍される輝き人にお話を伺うシリーズ。自分の目指した道で能力を伸ばすためのヒント、そして人生の転機における新たなチャレンジや学びについてお伝えします。第4回は、能楽の「謡」の表現で国内外の音楽家とコラボし、現代音楽として新たなステージを切り拓く、「現代のミューズ」とも称される能声楽家の青木涼子さんです。

横川 前回までのゲストは、私自身が長くお付き合いのある方でしたが、青木さんは本月初めてお会いする方で、能声楽という新たな分野で世界的に活躍されています。ドキドキする緊張とともに、未知のお話が聞けるワクワク感を持って、この場に臨んでいます。

実は誤解していたところがあり、700年の伝統がある能の世界で、新たな表現やジェンダーギャップも含め、風穴を開けようとされているのかと思っていたのですが、そういう気負ったチャレンジとは違うんですね。

青木 はい。能楽の謡という歌唱技術を活か

して、現代音楽の分野でまったく新しい音楽表現にチャレンジしているのです。

横川 「能声楽家」という肩書もご自身で考えた新語なのですか。

青木 最初はどうしても、新しい能をしている人間と捉えられ、想像していたのと違うと言われることがよくありました。私の公演は、能面はつけていないし、舞わないし。ですので、誤解のないネーミングを考えました。

横川 なぜジャズやポップスではなく現代音楽とのコラボを選んだのですか。

青木 現代音楽はクラシックの延長上にあるからです。バッハやブラームスも当時は現代音楽でした。逆に、今の現代音楽も100年後にはクラシックと呼ばれることでしょう。それまで音楽素材ではなかったものの、ピアノや弦楽四重奏以外の表現も研究して、作曲家が新しく曲を作ってきた歴史が現代音楽にはあるのです。1960年以降、尺八や琴など和楽器を用いた曲も作曲家がたくさん作ってきています。なので、謡を活かすにはこのジャンルが一番いいのではないかと選びました。

●初めて能を観てカッコいいと思った

横川 予習として青木さんのCD「夜の詞 能声楽とチエロのための作品集」を聴かせていただきました。シンガーですから当然ですが、引き込まれるいいお声をされていますね。

青木 ありがとうございます。子供の頃から声が低くて、みんなで合唱するときなどはキーが合わずコンプレックスでしたが、能の謡の表現にはそれが合ってたんですね。

横川 14歳で能を習い始めたそうですが、なにか今につながる予感があったのですか。

青木 小学生の夏休みに、家族で奈良にお寺を見に行きました。父親が建築家でお寺の設計を頼まれたのです。「すごくつまらい夏休みになりそう」と、子供心に思ったのですが、行ってみたら日本文化の素晴らしさと空間の美に感動したんです。それまでクラシックバレエをずっとやってましたが、伝統的な日本文化も学びたいという気持ちになりました。あるときテレビで解説付きの能の舞台を観て惹かれ、近くのカルチャースクールに通い始めたのが原点です。子供時代に、バレエと能という和洋の舞台芸術に惹かれて学んだことは、まちがいなく今につながっています。

最初の能のお稽古の日、舞う気満々で行った私に先生が「能は謡が大事。まずは座って謡いなさい」と。そうしたら低い声が合ってたこともあり、独特の深みのある謡い方に魅力を感じていました。

● 能楽師でも研究者でもない道を模索

横川 先生の勧めで東京藝大に進学されますが、そこで磨いたのは伝統的な能ですか。

青木 能楽観世流シテ方専攻という、代々能楽師の家の方が大多数のところ、修士課程

© SihoonKim-TIMF2019



特殊技術による幻想的な表現や遠隔地へのバーチャル出演なども積極的に取り組む。

© Junichi Takahashi



©サントリーホール



謡^{うたい}で世界初の音楽を拓いていく
能楽700年のDNAを抱き

青木涼子さん

を含めて6年間、基本的に実技でした。座学はほとんどなく、試験も能の実演です。

横川 その後、ロンドン大学の博士課程に留学し、博士号を取得されていますね。

青木 東京藝大の6年はどっぷりと能の世界に浸かっていたので、少し外から能を見るのもいいのではないかと思ひ留学しました。そのときは研究者になりたいと思ひていて、ヨーロッパ最大の日本研究科があるロンドン大学にしたのです。

ところが600ページの英語の博士論文が、指導教官から「もっと客観的にものを見なさい」とさんざんダメ出しされました。東京藝大の中は特殊で、能のことは「あれ、それ」で、1言えは10伝わる環境でしたので、私は能のことを客観的に見るということができていなかったんです。能を知らない人に能を説明する、それを英語で客観的に書くという経験が、すごく勉強になって今につながっていると思います。

横川 博士論文は「女性と能」というテーマですが、やはり女性は少ないのですか。

青木 東京藝大の同期では私1人でしたが、他の学年にはもう少しいました。

歌舞伎の創始者とされる出雲阿国^{いずものおくに}のように、能も初期の頃は、女性も猿楽の舞台に立っていたのです。ただ、能も歌舞伎も人気が出るにつれ春や風紀の乱れが目に見えようになり、徳川幕府によって女性の舞台出演が禁止されました。次に女性が公共の舞台に立つのは明治になってからでした。現在もプロの女性能楽師は少ないのですが、お稽古人口の大半は女性です。なので能楽を支えているのは女性と言えます。歌舞伎は、男性が女性を演じるのが芸とし

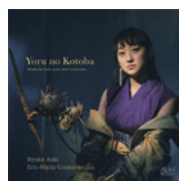
て定着し、未だに女性は舞台に立てません。能のシテ（主役）は面をつけるので、男も女も関係なさそうですが、やはり声質の差はあります。能で女を演じる場合も、女の声色ではなく男性の声による謡で表現します。そこに女性の声が入ることに違和感を持つ人は多いのかもしれない。私は逆にその声を活かして、伝統的な能の世界でも研究の世界でもない、第3の道として、謡を現代音楽として活かす道を選ぶことができたのです。

横川 能の主役のシテはこの世の者ではない設定だそうですね。観ている人が想像し、それぞれ感じ方が違っている。それを逆に共有するという面もある。そうした点で、能はもともと現代音楽とは相性が良い気がします。

青木 能の謡は、ベートーベンと何かやれと言われたら難しいですが、不協和音的な要素が多い



CD
「Noh x Contemporary Music」
税込価格3,080円
2014年発売



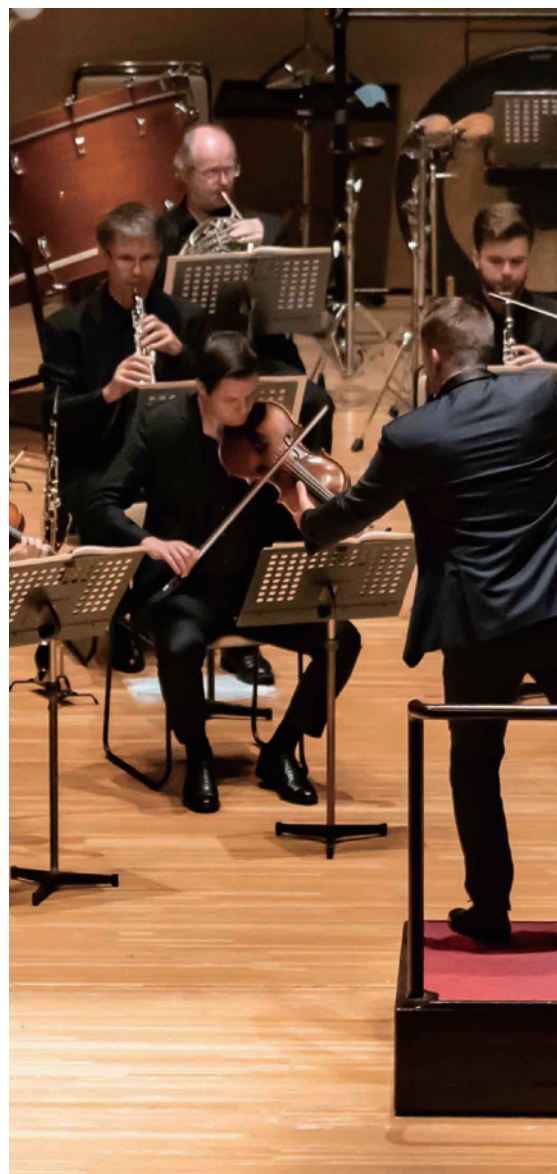
CD
「夜の詞 能声楽とチェロのための作品集」
税込価格3,080円
2021年発売



Ryoko Aoki
公式サイト
ryokoaoki.net



Ryoko Aoki
YouTubeチャンネル



現代音楽とはすごく合います。抽象性とちよとした空白があつて、想像力を働かせられます。ヨーロッパでは、現代音楽だけのコンサートや、クラシックのコンサートに1曲だけ現代曲が入っていることもあたりまえ。お客さんも新しい曲として私の謡を聴いてくれ、「なんだろう、聴いたことない不思議な声は。今日の歌手はソプラノじゃないけど面白いね」などと評価してくれる。後から日本の能だと知る。それをきっかけに日本の伝統文化や日本自体に興味を持つてくれたら、うれしいなと思っています。

●現代音楽の作曲家に曲を依頼

横川 藝大在学中から他のジャンルとのコラボレーションをしていたのですか。

青木 学生のレベルですが始めていました。私は能の家出身じゃないので、縛られることなく

好きなことができたのです。さらに大きなきっかけは、作曲家の湯浅譲二先生先生がずいぶん前に書かれた謡と西洋楽器のアンサンブル曲があつて、何十年かぶりに再演したいから、謡わないかと声をかけていただいたことです。

横川 新曲委嘱世界初演シリーズ「現代音楽

×能」始めたのは2010年ですか。

青木 はい。それまではオファーがあれば受ける形でしたが、2010年から自ら動いて、港区の助成金も受けて、世界の作曲家に依頼して曲を書いていただき、楽器と謡のコラボをする活動を始めました。今のところ20か国55人以上の作曲家が曲を書いてくれています。

謡とチェロの曲だったり、謡と弦楽四重奏の曲だったり。さらにその作曲家が「謡とオーケストラの曲が書きたい」と言つて、オーケストラから依頼が来るなど、シリーズ以外にもどんどん広がっていました。

横川 最初に依頼した相手は能を知っている方だったのですか。

青木 いえ、知りません。一番難しいのがそこで、日本人、外国人を問わず、現代音楽の作曲家さんは能のことを知らない方がほとんどです。音楽構造が全然違って、能の楽譜はお経みたいな感じです。最初は作曲家さんと無我

夢中で曲をつくっていましたが、作曲家が能のどういうところを知りたいのか、ニーズは何か、だんだん分かつてきたので、それをまとめたWEBサイト「作曲家のための謡の手引」をつくりました。作曲家が見て、西洋音楽と謡の違いと関連性が「あ、なるほど」と分かるようにしたのです。それからは直接会えない作曲家にも依頼しやすくなりました。

横川 それを自身でつくられたということは、素材となる英語の文献やテキストがほとんどなかったということなんですね。

青木 はい。英語の文献も、能の台本を訳したもののや場面の音楽の解説などはあるのですが、作曲家目線ではと見て分かるという資料はありませんでした。現代音楽の世界ではそう

いうサイトはよくあつて、たとえばトロンボーン奏者が、従来の奏法だけでなくこんな特殊で新しい奏法ができますと、新しい曲を書くヒントになるサイトをつくっていました。似たようなものをつくれないかなと思つたのです。

私たちも、能の従来の習い方で日本語で学んできたので、西洋音楽から見た謡の資料というのが日本語でもないのです。作曲家のひとと相談しながらサイトをつくりました。

●誤解から名作が生まれてもいい

横川 楽譜は理解できたとしても、謡の面白さみたいなものを理解してもらえないと始まらないですよ。そういう機会は積極的につくられているのですか。初めての方にいきなりお願いすることもあるのですか。

青木 まずは知り合いを通じて打診して、動画だけでなく実際の公演に招待して興味を持ってもらうこともあります。初めての相手にも、その人の曲が好きでダメ元で頼むことはあります。その時は無理でも、「こんな声なんだ」と知つていてもえたら何年か後に「書きたい」と連絡がきたりもするのです。

横川 基本的な謡い方は、能の謡から引用して謡うのですか。

青木 いえ、それぞれ違います。作曲家さんが謡の部分も作曲してきます。古典の通りに謡つてほしいという指示もありますが、大半は作曲家のオリジナルです。ですから作曲家にとつてはけっこうハードルが高いはずですよ。テキストもみんな好きなのを選んできます。俳句や短歌を勉強して「藤原定家で書きたい」とか、

バレエも能も学んだことで
海外でも通じ合える幅ができた



青木涼子さん

宮沢賢治の死ぬ間際の詩を素材にしてきたイタリア人もいらつしました。よくそんな詩を見つけてきたなと感心するほどです。

私は能に似たものをつくりたいわけではなく、700年のDNAが進化させた新しい芸術を作りたいのです。能をよく理解して能らしくつくつてほしいとは思いません。作曲家によっては楽譜をグラフィックのように書く方もいらっしゃると思いますが、その人の個性で新しい曲を書いてほしいのです。能のリズムはこうだからと私が勝手に変えることはしません。

横川 多様な感性の方とのコラボレーションですから、まったく予想がつかない不安と、わくわくと、両方ありそうですね。

青木 能の常識とはまったく違った視点で解釈した曲ができることもありますし、もはや謡でさえないということもあります。しかし、長い芸術の歴史では、誤読とか誤解によって画期的な作品が生まれるということが起きてきました。そういうのが面白いのです。日本の伝統文化である能が影響を与えてそれが生まれると想像すると、すごくうれしく感じます。伝統を守る能楽という背景があるからこそ、そうではないチャレンジが面白いと思えるのです。

横川 伝統派からバッシングされるなど、苦難を乗り越えてのチャレンジ、といったストーリーも当初は想定したのですが、なかったですか。

青木 バッシングはないですね。そもそもジャンルもマーケットも違うので。

苦難はけっこうありますよ。さんさん能をやってきて、自分の進むべき道がなかなか定まらなかったり、600ページの英語の博士論文に苦



労したり。作曲家と噛み合わないこともありますし。でもネガティブに捉えないようにしています。

横川 今年もドイツ、スペイン、ポルトガル、オーストラリアなど、海外での公演が多いようですが、観客の反応が日本とは違うのでしょうか。

● 自分たちの文化を学ぶ大切さ

青木 ヨーロッパではジャンルに関わらず新しい音楽を楽しむ習慣があつて、私の謡もその一つとして聴いて味わつて、後から「これは日本の伝統の声なんだ」と知る感じですね。私の次の日にガムラン（鉄琴のようなインドネシアの民族打楽器）とオーケストラの共演があつたりしても、日本だから良い、ガムランだから良いというのではなく、それぞれの楽曲の作品性や面白さを純粋に楽しんでおられます。

日本は伝統が強固で、他の国から見るとそういう伝統を長くキープしている素晴らしさを評価されていると思います。ヨーロッパ人も自分たちの伝統を大切にしつつ、そこから新しいものを見出していくのがすごく上手で、いつも感心します。演奏者の方も、バツハも弾くけど

現代音楽も弾くことができる。自分たちの伝統が身体に染み込んでいくからこそ、その幅があるのではないのでしょうか。

私は西洋に憧れてクラシックバレエを習っていましたが、日本の文化を知りたいとさらに能を学んだことで、ヨーロッパの観客とも通じ合える幅ができたのかなと思うのです。

横川 7月に浦和の二木屋さんという料亭でもコンサートをやられていますね。実は私の自宅はその近所なので、もう少し早く知っていたら行きたかったなと残念です。

青木 女将さんがずっと応援してくださっていて、いつかやりましようというのが実現しました。コンサートのあとセッティングを変えて、皆さんとおいしい食事をいただく、とてもアットホームなイベントでした。

横川 サントリーホールのような会場だけでなくこういう規模でもお呼びすることが可能なら、当財団の交流会で会員の方々にご披露する機会を持てるかもしれませんね。

青木 実現できるとうれしいです。

横川 またすぐにドイツに発たれるそうで、エネルギーなスケジュールを拝見して驚きました。応援する立場からは、少し身体もいたわりつつご活躍いただければと思います。

青木 やはり世界に日本の良さが伝わるとうれしいのです。身体はきついときもありますが、音楽の力で日本と他の国の懸け橋になったらと思っています。12月21日(水)19時より紀尾井ホールにて室内オーケストラとのコンサートもあります。ぜひお越しいただきたいです。

横川 本日はありがとうございました。

鬼の学び ⑬

作家／出版プロデューサー／劇団主宰

鬼塚忠のアンテナエッセイ

鬼塚 妹尾さんは今回書籍『世界は悪ガキを求めている』（東洋経済新報社）を上梓されましたね。その謳い文句が「世界最大の人材組織コンサルのヘッドハンター」となっています。どういう組織で、何をしているか軽く説明をお願いします。

妹尾 コーン・フェリーという米系の人材組織コンサルティング会社です。「コーン」と言うからにはトウモロコシの会社だろうと思えるかもしれませんが、そうではありません。Mr.コーンとMr.フェリーによって創設されたヘッドハンティングの会社です。いまではそこから発展して、広く人材育成、組織デザイン等人事全般を扱う世界最大手のコンサル会社となっています。

私はそこで30年ほどヘッドハンティングを専門とし、最後の10年は社員150人ほどの日本人の社長を兼任し、



夢に邁進する「悪ガキ」を探せ

2年前からは特別顧問をしています。

ヘッドハンティングという仕事は、個人の転職のお手伝いをする人材紹介業ではなく、雇用会社側に立って、特定のポジションに最適な人材を見つけて、その人を引き抜くお手伝いをするものです。以前は、「いい人を見つけてもらう」ことに期待の大半がいましたが、現在では、情報システムが発達しているので、見つけ出すこと自体よりも、見つけ出した人物がポジションに相応しいかどうかを見抜くノウハウ、選ばれた人を上手に口説き落とせるかどうか、そのあたりが腕の見せ所となっています。

幸福を得られる仕事とは

鬼塚 時代は変わっているということですね。すこし意地悪な質問かもしれませんが、その人材を高給で招くと思うのですが、高給がビジネスパースンの幸福にどれだけつながりますか？

妹尾 お金と幸せに関するご質問ですね？ヘッドハンターというと、高い年収で候補者を釣るというイメージがあるかもしれませんが、必ずしもそうではありません。ヘッドハントされて年収が上がるのはいわば当然の話で、それ以

外の要素に大きな魅力がなければ有能なエグゼクティブは引き抜けません。私は候補者の真剣度を探るために、こんなお話をよくします。

「もしもこのお話で縁があった場合には、結果的に、年収は必ず上がります。ですから、お金のことは少し忘れてください。むしろ私がきょうお伺いしたいのは、〇〇さんは現在の仕事にワクワクしていますか、ということですね」

ビジネスパーソンにとっての幸福は、「働きがい」のある仕事をしているかどうかと大いに関係があります。

鬼塚 では、働きがいのあることで人は幸福になれるのですか？

妹尾 働きがいのある仕事に就くことと幸福とは大いに関係があると思います。ではいったい何が「働きがい」を創り出すのか？その仕事があなたにとってどういう「意味」があるのかを知るべきです。社会にいい影響を与える、これはまさに意味ある仕事の典型です。価値ある仕事と言ってもいいでしょう。また、意識しているかはいか別として、多くの人が「周囲の期待に応える」ことに生きがいを感じています。

また、社会的な価値はともかく、やっているとにかく

妹尾輝男

（せのお・てるお） コーン・フェリー元日本代表。1975年、横浜国立大学卒業。ロンドン、パミュダ諸島、東京にて石油製品トレーディング会社に勤務した後、1988年、スタンフォード大学で経営学修士(MBA)取得。ペイン・アンド・カンパニーを経て、世界最大の人材組織コンサルティング会社コーン・フェリーに入社。同グループで30年以上、主にグローバル・トップ企業のエグゼクティブ・クラスを対象に、ヘッドハンターとして第一線で活躍。その間、日本法人社長を9年間、会長を1年間務め、現在は特別顧問。ヘッドハントしたエグゼクティブの数は400人を超える。



『世界は悪ガキを求めている』（東洋経済新報社）

く楽しいという仕事もあるでしょう。それはあなたにとつて間違いなく意味のある仕事です。集中できる、夢中になれる、時間を忘れる、ワクワクする。こうした現象は、あなたが意味のある仕事をしている証拠です。子供の頃に夢中になってやっていたことは、今思えばすべて将来の成長のために必要だった、いわば「意味のある仕事」だったのかもしれない。つまり、「やりがいのある仕事」とは学習や成長と結びついたものなのです。

悪ガキの復権が日本を輝かせる

鬼塚 話は少し戻りますが、最近、頻繁に日本では給与が上がらないとか言っていますが、これはどう解釈していますか？

妹尾 これはとても深刻な問題だと思っています。「清貧に甘んじる生き方」も個人の生き方としては悪くないのですが、国として社会として覇気を失うことは絶対によくありません。覇気のない国や社会は、人々に生き方の選択肢の幅を狭めます。最終的には、大多数の国民に「清貧に甘んじる」生き方を強制する結果となります。さらに、子孫にネガティブな贈り物を用意するという最悪の事態にもつながります。

ではこの20〜30年間、先進国中日本だけが経済も賃金

も成長してこなかったのは、いったい誰のせいでしょうか？
第一義的には、国のリーダー達の責任です。昭和的、予定調和的な立法・行政のやり方を変えることができませんでした。政治家や官僚だけでなく、経済界や学問・教育界のリーダーたちも既得権益に縛られっぱなしでした。子供だましのきれいなことがまかり通る社会を作ってしまった。

ですが、最終的にはこうしたリーダーにすべてを任せっきりにしたわれわれ国民一人一人が愚かだったのです。われわれ一人一人が性善説に立ったふりをして問題を先送りしてきました。周りを過剰に忖度して、正論をズバリと言う人がいなくなりました。自分の考えや好き嫌いを主張することを、何か失礼のことのように感じるようになり、競争や生存に不可欠な「アニマルスピリット」を、野蛮なもの、気まずいものとして遠ざけました。こうした情けない現状を打開するために、私は「悪ガキ」の復権を訴えています。根性のひねくれた「不良」のことを指しているのではなく、夢の追求に邁進する愛すべき「悪ガキ」のことを言っているのです。

鬼塚 「悪ガキのリーダー」が増えることで、日本はもっと輝き、表舞台に立ってますか？

妹尾 はい。私はそう信じています。日本人の底力は明

治維新でも戦後の経済復興でも遺憾なく発揮されました。みんなが耳に聞こえのいいきれいなことを言っている時代はダメです。黒船や原爆は金輪際「免ですけど、事なかれ主義のリーダー達が早く引退して、アニマル・スピリットに目覚めた若い人たちがもっと活躍する日が近いことを祈っています。

本当にやりたいことを始めようか

鬼塚 60歳くらいになってまだ仕事をやりつくしていないと思う人はどうすればいいですか？

妹尾 いや逆に、ある年齢になったら「やり尽くした感」が出る、というものではないと思います。それは人によって様々なはずです。例えば、坂本龍馬は「やり尽くした感」を覚えることなく31歳で非業の死を遂げました。一方、伊能忠敬は平均寿命40歳あまりと言われた時代において、初の日本地図を作成すべく55歳で全国測量の旅に出ました。そして73歳の高齢で亡くなったとき、恐らく彼はまだ「やり尽くした感」を持っていなかったのではないかと思います。ホイットマンは、情熱を失った時が青春の終わる時だと言いましたが、学習や成長を続ける限り「やり尽くした感」はありえないと思います。

鬼塚 読者に対するアドバイスを。

妹尾 ひと言で言えば、伊能忠敬を見習え、ということになります。

「様々な経験を経ていい感じの年齢になってきたから、さあそろそろ本当にやりたいことを始めようか」そんな気持ちになって欲しいと思います。

心に響く言葉を大切に、ワクワクすることを実行する。好奇心を持って、新しいことを学ぶ。自分の中に確かに成長している部分があると実感する。こうしたことを実践してほしいと思います。実は、私はもうかなりの年齢なのですが、まだまだ「ほんの若造」のつもりです。

●著者プロフィール

鬼塚忠（おにつか ただし）1965年鹿児島市生まれ。鹿児島大学卒業。大学卒業後、2年間かけて、アジア・オセアニア、中近東、アフリカ、ヨーロッパなど世界40か国を放浪。ヨーロッパでお金が底をつき、シベリア鉄道で帰国。帰国時、所持金は1万円を切っていた。1997年より2001年6月まで海外書籍の版權エージェント会社「イングリッシュ・エージェンシー」に勤務。映画の原作、ビジネス書、スポーツ関連書籍など年間60点ほどの翻訳書籍を手掛ける。次に海外の作家ではなく、日本人作家のエージェントをしたいと思い、2001年10月にアップルシード・エージェンシーを設立。現在では作家のエージェント会社の経営者であるとともに、作家、脚本家、劇団もしも主宰でもある。

著書:『風の色』（講談社）2018年映画化。『花戦さ』（角川書店）2017年映画化。日本アカデミー賞優秀作品賞受賞。『Little DJ』（ポプラ社）2007年映画化。『カルテット!』（河出書房新社）2012年映画化。『海峡を渡るバイオリン』（河出書房新社）2004年フジテレビ45周年記念ドラマ化。文化庁芸術祭優秀賞受賞。『恋文讃歌』（河出書房新社）、『僕たちのプレイボール』（幻冬舎）2012年映画化など多数。



第3回 募集中

生涯学習開発財団 松田妙子賞

Share Your Happiness!

「生涯学習開発財団 松田妙子賞」は、
「生涯学習」の新たな発展に寄与する個人や企業・団体を顕彰し、
その活動内容および「生涯学習」の意義を広く社会に知らしめる目的で、
2020年に創設しました。

松田妙子賞創設の背景



生涯学習開発財団の前理事長 松田妙子は、1983年の財団設立以来約40年近くにわたり、「生涯学習」推進のため、資格認定団体の後援や50歳以上の博士号取得支援など、さまざまな活動を行ってきました。

賞のテーマである「Share Your Happiness」は、大祖父の大森兵蔵、父の松田竹千代を通して松田家に受け継がれてきた「自分が恵まれていると思ったら世の中に恩返しをなさい」というスピリットにもとづいており、松田妙子前理事長が大切にしていた社会貢献の願いが込められています。

松田妙子前理事長は26歳で単身渡米し、帰国後は戦後日本のイメージを回復しようと日本初のPR会社を設立し、日本の住宅品質改善のために日本ホームズや住宅産業研修財団を創設しました。生涯学習開発財団では長寿社会を見越した生き方を提言し、自身も71歳で東京大学博士号（工学）を取得、その研究は大工育成塾創設につながりました。自らが

生涯学習のロールモデルとなり、2019年に亡くなるまで生涯現役を貫きました。

本賞が、松田妙子の「学び続けることが、個人も社会も豊かにする」という意思を受け継ぎ、より良い社会に寄与することを目指しています。

正賞・副賞

正賞：記念品

副賞：賞金100万円

応募方法

指定の申請書による（財団WEBサイトよりダウンロードできます）

※申請にともなう提出物は返却いたしません

スケジュール

募集締切：2022年10月3日消印有効

決 定：2022年12月

表 彰 式：2023年1月末予定

締切迫る!
10/3
消印有効

お問合せと募集要項の請求は下記まで



一般財団法人 生涯学習開発財団 事務局

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-20 虎ノ門実業会館8階 TEL 03-3508-4551

募集要項・申請書は <http://www.gllc.or.jp> E-mail gllc@gllc.or.jp